

# 青森県佐井村磯谷のテラ行事調査報告

古川 実<sup>1)</sup>

The Report on Tera ritual at Isoya (Sai, Aomori prefecture)

Minoru Kogawa

(キーワード：テラ ババド (老母会) テラ行事)

## はじめに

筆者は青森県下北地方の「テラ」、「テラこ」などと呼ばれる宗教的な施設において、ムラの女性たちが行う行事などを本紀要に調査報告してきた<sup>2)</sup>。引き続き今年度も佐井村磯谷のテラ行事などの調査報告を行う。

磯谷は1963年から2か年にわたって行われた九学会連合下北半島調査で集約的調査がなされたムラの一つである。当時の磯谷のテラや女性組織にふれたいくつかの報告があり、特に宮本常一と伊藤幹治の報告は参考となった<sup>3)</sup>。また、2002年の清野耕司の調査報告があり、地蔵講をテーマにしたものではあるが、磯谷のテラ行事全般にわたる内容が報告されていて参考となった<sup>4)</sup>。

なお、本報告では下北地方の主要な寺院の一つである佐井村佐井の長福寺(曹洞宗)での調査報告も断片的な内容ではあるが加えた。ムラが主体となって管理・運営するテラにおける民俗行事などと、檀家組織の中心となる檀那寺との関わりについて注意する必要があると考えるからである。

## 1 磯谷の概況

磯谷は下北半島西岸中央部に位置し、津軽海峡に面する海村である。山地が迫る海岸沿いに道路を挟んで家屋が並び、山側に主屋、道路向かいの海側に漁具などを置く建物が設置されている。明治初年編纂の『新撰陸奥国誌』では磯谷は佐井村の支村であり、海に沿って住み、男は北海道に渡って稼ぎ、婦人が家に居て耕作すると記している<sup>5)</sup>。なお、前述の家並みの景観は同書で既に述べられており、磯谷の住環境には昔から現在まで継続する制約があることを考えさせられる。家が建て込んでいて壁の窓だと十分明かりがとれないから、屋根に窓(ソラマドと呼ぶ)を付けているというお話も、そのような制約の現れといえよう。

笹澤魯羊著『佐井村誌』「戸口」によれば、磯谷の戸数・人口は享和2(1802)年調に14軒、明治8(1875)年調に25軒、明治22(1889)年町村制施行時25戸、昭和10(1935)年国勢調査では世帯数31、人口359人<sup>6)</sup>。また同書において笹澤は昭和10年の国勢調査などから、磯谷では10人以上の大家族が全世帯の半数以上を占め、また津軽方面から嫁をもらう者が多いことも指摘している<sup>7)</sup>。『2012年村勢要覧 資料編』によれば、2010年国勢調査では世帯数55、人口158人、1世帯当たり人員が2.9人であり、人口減少の大きさや家族構成の変化が窺える<sup>8)</sup>。

生業は前沖での漁やコンブ、ウニなどの磯回りの漁による漁獲を主にし、山仕事や北海道への出稼ぎで生計を補ってきたようである。コンブやウニは水揚げに続いて、時間をかけずにコンブ干しやウニの身を取る作業を行う必要がある、家族総出の作業となる。各家にはコンブ干し場があり、必要があれば屋内にも干せるように家の中にも番線を渡しているという。女性の手が必要であり、これらの作業は後述するテラ行事にも影響しているようである。

産土神社は八幡宮。また、ムラ境あたりに明神様の祠を祀っている。前掲『佐井村誌』によれば八幡宮は享保4(1719)年勧請、明神様は早天に雨を祈るところで、傍らに小さい池沼があって、水面の白く曇っている間は晴天が続き、水面が清澄になると降雨するという言い伝えがあるという<sup>9)</sup>。佐井の長福寺の檀家が多く、現在約50軒のうち長福寺が34軒、その他には佐井の発信寺(浄土宗)が多い。

## 2 磯谷のテラ

### (1) テラの概要

磯谷漁港に入る北側の道の山側にムラの墓地があり、その敷地内に磯谷のテラである磯山寺が所在する。普段は「テラ」、「テラこ」と呼んでいる。間口4間に奥行き5間半ほどの建物で、広間一つに台所とトイレを付けている。広間の奥を三つに仕切って祭壇とし、正面に仏壇を設置しその中に仏像2体を祀る。向かって左側の仕切りに地蔵、弘法大師像など6体、右側の仕切りに小さい地蔵の石像や木像を数体祀る。正面の鴨居に掛け仏を下げ、祭壇下の両脇に昭和27(1952)年の墨書がある賽銭箱を置いている。祭壇の右側の壁に人形が置かれ、麦わら帽子が掛けられていて、

1) 青森県立郷土館学芸課長 (〒030-0802 青森市本町二丁目8の14)

これらは亡くなった人の供養として、生前使っていた物を家人が掛けたものだという。祭壇前に台を据え、上に磬子、下に木魚を置く。テラの本尊は釈迦如来で阿弥陀様も祀っているというが、確認できなかった。

広間の壁には「十三仏真言」「舍利礼文」「懺悔偈」「般若心経」の文句を掲示した紙を貼っている。また、テラ整備にあたっての寄付者名を墨書した板を取り付けている。古い順に昭和27年の「磯山寺改築寄付御芳名」、平成2年の「磯山寺修築工事寄付御芳名」、平成11年の「六体地藏新設」、平成19年の「磯山寺屋根張替寄付者御芳名」である。各整備において大口の寄付者となっているのは、磯谷老母会・磯谷地区会・磯谷地区納税組合・磯谷氏子・磯谷敬神会・磯谷漁師総代・磯谷漁協婦人部などである。平成11年の「六体地藏新設」では老母会と氏子総代の寄付があり、老母会を構成する56名の名前と名前の頭に家印が記されている。

無住のテラであり、管理運営はムラの施設として磯谷が主体となって行っている。このテラに参るのは、磯谷の神仏に関わる行事や和讃・経の唱えのために参集するムラの女性たちがほとんどで、そのほか、亡くなった人の命日などに家人が賽銭やお菓子などを上げにお参りする。佐井の本寺から僧職が来るのは通夜、葬式のときで、テラでの行事には来ていない。磯谷各家の位牌堂は佐井の本寺にあり、磯谷から佐井に車で行きお参りしている。

## (2) テラの管理

テラを管理・運営するのは磯谷の主婦・姑たちで、ババドとか老母会と呼んでいる。ババドには各家から女性1人が出るようになっており、若くても出ている。ただし、漁の手伝いなどでテラにお参りできないときもあり、現在は18人から20人くらいがテラに集まっている。磯谷ではテラに集まるのが年に70数回にのぼるといふ。

テラの掃除や行事の準備などをするのはババドの中の当番が行っていて、ババヤクとも呼ぶ。磯谷全戸が入る地区会は地区分けで4班に分かれているが、ババドは5班に地区分けし各班の班長1人が当番となる。テラの仕事は回数が多く人数も必要であり、当番5人を確保するために5班としている。当番の順を書き付けた帳面があり、その順で1年交代で当番は回るが、体具合や家の事情などを考え順を後回しにすることもあり、だいたい5、6年ごとに当たっている。1月16日のババドの総会で交代する。

当番は1年1回千円の会費を徴収したり、テラの賽銭を管理するなど会計処理も行う。また、葬式に使う祭壇などは磯谷のセンターにあるが、通夜で使う屏風や亡くなって直ぐに掛ける十三仏の掛け軸などはテラに保管しており、その貸出も行っている。

## (3) 行事

テラの行事を新暦で記す（テラに掲示していた平成28年1月付けの貼り紙「老婆(ママ)会参り日」）を転記）。

1月	1日	初詣	5日	お鏡なおし	6日	お参り	8日	薬師様	18日	お参り	19日	明神様
		班長が参る	24日	お参り								
2月	6日	お参り	8日	薬師様	18日	お参り	19日	明神様	班長が参る	24日	お参り	
3月	6日	お参り	8日	薬師様	16日	おしら様命日	18日	お参り				
	19日	明神様命日	1日	休み	21日	彼岸中日	1日	休み	24日	お参り		
4月	6日	お参り	8日	薬師様	18日	お参り	19日	明神様	班長が参る	24日	お参り	
5月	6日	お参り	8日	薬師様	1日	休み	18日	お参り	19日	明神様	24日	お参り
6月	6日	お参り	8日	薬師様	18日	お参り	19日	明神様	班長が参る	24日	お参り	
7月	1日	むげがら節句	お参り	1日	休み	6日	お参り	8日	薬師様	18日	お参り	
	19日	明神様	班長が参る	20日	海の日	1日	休み	24日	お参り			
8月	6日	お参り	7日	七日盆	8日	薬師様	13日	お盆	18日	お参り		
	19日	明神様	班長が参る	20日	二十日盆	1日	休み	お参り	24日	お参り		
9月	1日	二百十日	1日	休み	6日	お参り	8日	薬師様	16日	おしら様	18日	お参り
	19日	明神様	班長が参る	23日	彼岸中日	24日	お参り					
10月	6日	お参り	8日	薬師様	18日	お参り	19日	明神様	班長が参る	24日	お参り	
11月	6日	お参り	8日	薬師様	18日	お参り	19日	明神様	班長が参る	24日	お参り	
12月	1日	坐禅参り	4日	坐禅参り	6日	お参り	7日	坐禅参り	8日	薬師様		
	9日	豆しとぎ	個人参り	16日	おしら様	17日	すす払い	9時から	18日	お参り		
	19日	明神様	1日	休み	24日	お参り						

※ うに籠時期（漁期は4、5月となるという。筆者注）のお参り時間 8日は13時参り 6日、18日、24日は12時参り

盆期間のテラ参りは次のとおり（テラに掲示されていた「8月盆休みについて」の貼り紙の内容を転記）。

7日 午前8時から休み 13日 午前7時から休み 14日 午前8時から休み 15日 休み  
 16日 休み 17日 午前8時から休み（取り消し線があり、「18日 休み」と加筆。筆者注）  
 19日 午前8時から休み 20日 休み 尚、6日、8日は通常通りのお参り

テラにお参りする日は、毎月6日、8日、18日、19日、24日である。6日はジュズフキ（大数珠を回す）。8日は薬師様（八幡様とも）の日で、当番だけが八幡宮に朝食前にお参りに行き、その後に9時ごろからテラに行き準備をする。ただ、八幡宮が高台にあるため年寄りには登るのが大変なので、神像をテラの仏壇脇に祀ることになり、現在、冬期間は9時からテラでお参りするようになっている。18日は観音様の日、19日は集落のはずれに祀る明神様の日、24日は地藏様の日ということでお参りする。6日にお参りするいわれは宮本の調査報告によれば、山に仕事に出たバアちゃんを探しに行った孫がキツネにさらわれてしまい、一週間後に山中で見つかった。それ以来、6日はムラでは山働きをしないでババはテラにこもるようになったという<sup>10)</sup>。なお、この伝承について清野の調査報告では、すでに確認できなくなっている<sup>11)</sup>としており、それは筆者も同様であった。

月ごとの行事のほかに年間の行事としてテラに集まるのは、春秋の彼岸、7月1日のムケガラ節供、盆、12月1日・4日・7日のザゼンなどがあり、月ごとのお参りと同じことを行う。ザゼンは昔は12月1日から7日までの1週間毎日テラで唱えをしたが、今は短くなった。この期間に本寺から僧職が来ることはなく、特別に作る料理もない。佐井の長福寺では、ザゼンの行事に精進料理を作り、集まった人をもてなしているという。なお、3月と9月の16日はオシラサマの日で、これは神様がテラを嫌がるので、オシラサマを預かっている家を宿にして集まっている。昔は16品の料理を作り四つの膳にして、一つは宿の家に上げ、ほかの三つを集まった人が食べた。宿代として3,000円を年2回、またその日の賽銭を宿の家に出している。

テラに参る日は当番の家で赤い旗を掲げる。今日は休みの日だから畑仕事や浜には出られないという意味だという。当番は準備のためテラに早く出向き、お供えを上げロウソクに火を灯す。お参りの人はテラに来ると各自、菓子やご飯、自分で作った団子などをあげ賽銭を入れて仏様を拜む。人が揃ったところに皆で和讃・経を唱え、終わると当番が「いただきます」とお茶やお菓子を出し、しばらく世間話などをしながら過ごす。2時間くらいテラにいることになるという。

和讃・経は通例は「ツトメ」と「舍利礼文」の二つを唱えるが、18、24日はツトメの次に「ハイコ」と呼んでいる。「懺悔偈」を唱え、最後に舍利礼文を唱える。習熟した人や御詠歌を習った人などが唱えるときの先立ちになり、祭壇前の台のところに座って唱え、磬子や木魚を打って調子をつける。それに合わせて皆が一斉に唱える。唱える文句・調子は書いたものがなく暗記している。津軽から嫁入りしたという話者は、集まりの後にテラに残って練習したりレコーダーを買って練習したりしたという。通夜に僧職が来られないときは喪家にババドが行き舍利礼文を唱えた。

かつてババドが大和講の御詠歌を習い発表大会に出たこともあったが、現在集まっている人の姑にあたる世代までのことで、御詠歌を覚えている人が少なくなり、今は2人くらいしか先立ちになれる人がいないという。

平成30年に筆者が実見した秋彼岸、ジュズフキ、観音様の日のテラ行事の概要を次に記す。

秋彼岸（平成30年9月23日） 午前9時30分ごろから当番がテラに集まり10時ごろから準備が始まる。11時に和讃・経を唱える。参集者は11人。当番が祭壇のロウソクに火を付ける。次に先立ちする人が前に出て座り、先立ちの人に合せて一斉に唱える。先立ちする人は唱えながら木魚を打つ。最初はツトメを唱える。

「ナムシャカムニブツ ナムシャカムニブツ ナムシャカムニブツ」（これを一節とし3回繰り返す）

「ナムダイシタイシノカンゼオン ナムダイシタイシノカンゼオン ナムダイシタイシノカンゼオン」（同前）

「ナムエンメイジゾウボサツ ナムエンメイジゾウボサツ ナムエンメイジゾウボサツ」（同前）

「ナムヤクシルリコウニョライ ナムヤクシルリコウニョライ ナムヤクシルリコウニョライ」（同前）

「ナムサンゼンショウボサツ ナムサンゼンショウボサツ ナムサンゼンショウボサツ」（同前）

各節の繰り返しが終わると磬子を3回打つ。

続いて次の舍利礼文を唱える。先立ちの人が木魚を打つ。

「イッシンチョウライ マントクエンマン シャカニョライ シンジンシャリ ホンヂホッシン ホウカイトウバ  
 ガトウライキョウ イガゲンシンニウガ ガニウブツガ ゼコガショウボウダイ イブツジンリキ リヤク  
 シュ ジョウ ホツボダイシン シュウボサツギョウ ドウニユウエンジャク ビョウドウタイチ コンショウ  
 チョウ ライ」（3回繰り返す）

1回終わると先立ちの人が磬子を3回打つ。最後は磬子を3回打ち祭壇の正面、左右を拜んで終了となる。

ジュズフキ（平成30年10月6日） 午前10時前に当番がテラに来て準備を始める。祭壇下の物入れから大数珠、鉦鼓

を出す。祭壇には供物をあげて拝む。普段は集落のカミ（南側、長後方面）の端の家のところとシモ（北側、佐井方面）の端の家のところで大数珠を回し、最後にテラに戻ってテラの下の道路で大数珠を回すが、当日は雨模様のためカミで回すだけにし、ジュズフキは家の中で行うということとなった。

10時30分ごろ、テラから当番3人が出て行く。1人は布に包んだ大数珠を背負い、1人は鉦鼓をときどき叩きながらムラを回る。最初はカミへ向かい集落の最後の家となるT家を宿にし、仏間が続いている居間で大数珠を回すこととなった。仏壇が見えるように間仕切りの襖を開け、その際神棚が見えていてもかまわないという。居間の広さに合わせて大数珠を二重にして輪にする。輪の真ん中に先立ちになる人が座り、鉦鼓を打ちながら唱える。それに続いて数珠を手を取った回りの人が数珠を左回りで回しながら唱える。当番以外の人も宿に来てジュズフキに加わっており、先立ちの人も含めて6人である。数珠の大玉が回った人は大玉を捧げて拝む。

唱えは、先立ちの人が鉦鼓を打ちながら「ナム アミ ダー ブツ」と唱えると、回りの人が「ナム アミ ダー ブツ」と続ける。これを繰り返し、最後は先立ちの人が鉦鼓を連打し数珠を回すことを止める。体の不調な部分などに各々が数珠をこすりつけて終了。当番は大数珠を包み宿を出る。

テラでは10人くらいの人数となっている。当番が祭壇にロウソクを灯し、人数が増えたので数珠を一重にして磬子と木魚を置く祭壇前の台を中に入れて輪にする。祭壇前は開けて各人が数珠の輪に沿って間隔をとりながら座り、輪の中の台の前に先立ちとなる人が座る。先立ちの人の唱えに続き回りの人が数珠を左回りに回しながら唱える。唱える内容は宿で行ったのと同様である。終わると大数珠を巻いて台上の磬子の隣に置き、巻いた上にご飯のお供えをあげる。先立ちの人が磬子を3回打ち、祭壇の正面、左右を拝む。この後、彼岸と同様にツトメと舍利札文を唱え、11時すぎに終了。

なお、ジュズフキはかつては6日以外にも病気が流行ると行うなど、願い事があると随時行っていたという。

**観音様の日（平成30年11月18日）** 9時30分ごろから当番が準備を始める。祭壇の正面に7本、右側に1本、左側の地藏の前に7本のロウソクを立て、お菓子、ご飯のお供えと水をあげる。この日は8時から佐井の発信寺（浄土宗）で十夜のオツトメ（行）があるため、そちらに行ってからテラに来る人がいるという。また、出られないのでテラ参りの賽銭を当番に預けて帰る人もいた。

10時30分ごろから人が集まり、11時に和讃・経の唱えを始める。先立ちの人が祭壇前の台のところに座る。磬子を3回打ち祭壇の三方を拝み唱えを始める。最初はツトメを唱えるが彼岸やジュズフキの日と異なり、先立ちの人が唱えた後にほかの人が復唱し、それを3回繰り返す。また、文句を長く延ばす唱え方となり調子は緩やかである。

次に懺悔偈を唱える。文句は次のとおり。

「ガシャクシヨブウ ショアクゴウ カイユムシ トンシンチ ジュウシン ゴイシショシヨウ」（3回繰り返す）  
次に舍利札文を3回繰り返す。

### 3 長福寺の行事など

下北地方の曹洞宗寺院はむつ市田名部の円通寺が中心の寺院であり、次に佐井の長福寺が格式のある寺院とされる。長福寺には仏舎利塔が建立されており、鎌倉建長寺との縁があって仏舎利が伝えられたという。檀家が多く広域にわたって檀家が所在するため、地域によって程度の差はあるものの、各地域のテラの行事・運営などに長福寺が何らかの関わりを持ってきたものと考えられる。ここでは長福寺住職ご夫妻からうかがった長福寺の行事のうち、地域の人が寺に参集したり、僧職が地域に出向いたりする行事を月ごとに記す。なお、月日は新暦である。

1月 元日には寺のすべてのお姿（神仏像）100体ほどに三つ重ねのお供えを上げており、2斗7升分ほど餅を搗く。本尊の釈迦をはじめ金比羅、祖師様、千手観音、薬師、弁天、不動明王、大黒、韋駄天など数多い。本尊には雑煮も上げている。昔は寺でお供えを受け各家の位牌に上げていたが、2年前から各家にお願いしており、30日の夕方から上げられるようにしている。佐井村佐井では、正月に親戚の位牌がある寺を宗派に関わらずお参りする風習があり、長福寺への参拝者が年越しとともに続くことになるという。参拝者がいるまで寺では対応しているので、3日間は午前2時半くらいまではロウソクに火を灯しており、その番をしたりお供えの上げ下げもあったりと、正月は大変な仕事になるという。

年越しの0時30分からと2、3日の午前9時から修正会の大般若祈禱を行う。この祈禱は今生きている人のことなので優先しており、3日間は葬儀に行けない。祈禱のあと祈禱札を参拝者にあげる。

10日、初金比羅様の祈禱。御講（おんこう、おこう）といって、当番で食事を作り参拝者に出す。この日は漁師が多く参拝する。26日、高祖降誕会。

2月 3日、節分会。豆を撒きお菓子、お供えなどを一緒に入れたものを配る。毎年15、6人来て立春大吉の札をもらっていく。檀家の人に頼んで飾りなどを手伝ってもらう。

15日、涅槃会。月遅れの3月に行っていたが、彼岸が近いので新暦で行うようになった。昔は各家で団子を作り持ってきたが、今は高齢化でできない家が多くなり、婦人会が団子を作って行事を手伝うようになった。須弥壇のところ団子を供えこれを撒く。団子は釈迦の舍利（骨）をなぞったものという。

3月 11日、東日本大震災追悼・復興祈願鳴鐘。

彼岸 18日に川目地区に行き諷誦文読み上げを行う。21日から24日、彼岸の入りから明けまで寺で諷誦文読み上げ総供養を行う。供養の申し込み分の全部を読み上げる。各戒名をよみ次に「先祖代々」と読む。1人で読み上げると2時間弱かかり大変で、近年は副住職と2人で読み上げている。撒き銭といって本堂敷居のあたりにお金を投げているが、これは曹洞宗ではもともと行わないことで、人数も多いので止めてもらい、今は焼香をして手を合わせてもらうようにしている。地区や宗派によっては、撒き銭を行っているところもある。

4月 8日、佐井村牛滝の真如庵の花祭り・薬師様供養のため出向く。15日、弁天様御祈祷。

5月 8日、長福寺で釈尊降誕祭・花祭り・薬師様の供養を行う。山に薬師様を祀っていて、真ん中に薬師、脇に地藏、観音の石像がある。昔は歩いて行ったが今は車で行く。7日が宵宮で子供を連れて皆お参りし夜店も出ていたが、今は人が出なくなっている。井戸があつてそこから水を引いた池が二つあり、その水で目を洗うと眼病が直るといふ言い伝えがある。漁師や山仕事関係の人が多く祈祷を願いに来た。祈願すると漁は大漁になるという。

7月 20日は弁天様祭典。長福寺が昔から弁天様のベツトウとなっている。19日が宵宮で16時から境内の金比羅堂で祈祷。20日に佐井共済会の神楽が先導して、寺から港にある弁天社まで弁天様を遷座する。今は陸続きになった小さい島（権部島）に弁天社を祀っている。遷座の行列の道順は昔から決まっており、陸続きとなっているが船に弁天様を乗せることもする。漁師の神様で不浄を嫌う女性が近づくことを制限する。特に産不浄が厳しいといわれている。この社に泊まり込みをする人もいる。しきたりがあつて、遷座の途中に神楽の囃子を切らしてはいけない、弁天様が社に入って囃子を止める、神楽は寺の門から中に入れない、などという。

8月 孟蘭盆会。13日に長福寺墓地と佐井村矢越地区墓地に出向き供養。14、15日は佐井村佐井地区の各家棚経。

16日に大施食会法要、大間町材木地区棚経。20日に風間浦村蛇浦地区棚経。下北の北通り（むつ市大畑町、風間浦村、大間町、佐井村地域にはほぼ該当する）では、かつてはむつ市大畑の大安寺と長福寺しか曹洞宗の寺がなく、風間浦村蛇浦を境にして檀家が大安寺と長福寺に別れていたため、長福寺の檀家は佐井村のほかにも大間町、風間浦村にもあるという。

9月 彼岸（春の彼岸と同様）。29日、両祖忌。

10月 5日、達磨忌。10月となると秋回りといって遠い地区の檀家回りをするが、大間の材木ではテラでの先祖供養のフジモン（諷誦文）のとき住職の後ろにお金を投げている。このお金はババ会のお金になった。

11月 10日、納金比羅様・稲荷様御祈祷諷経。

12月 6、7日は坐禅会で諷誦文読み上げ。8日は釈尊成道会。ザゼンの行事は各ムラで行っていて、長福寺にも参りに来る。昔は1日から7日まで行ったが今は短縮し、6日、7日に諷誦文の読み上げをしている。早朝2、3時から寺に集まって準備などをし、住職のオットメを聞いてからお講をして皆で食事をする。お供えを下げてそれを食べるのをお講といっている。お講は佐井の檀家が当番で準備をしていたが、当番ができない場合に反則金を取ったりして問題となったこともあり、数年前から当番を止めることとした。また、ザゼンの中日に寺でお粥を出していたが、8日に出すように変わった。今年はお粥の代わりに、今の人の口に合うように肉類を一切使わない精進カレーライスを出してみることにしたそうである。ザゼンでの食事は精進料理で出汁にも肉・魚を使わないものだが、今の70、80歳代くらいの人から知っている人が少なくなってきたように感じるという。昔は寺への進物を持参し、子供連れで寺に来る人もいて、輪島塗の器が300人分くらい寺に用意されているという。

31日、除夜の鐘。

#### 4 まとめと課題

磯谷のテラに関する1960年代、2000年代の調査報告と現在の筆者の調査とを大雑把に比較してみると、6日のテラ参りのいわれに関する伝承がなくなっているなど、地域の行事への地域なりの理由付けや解説が失われて来ているように感じる。一方、ババド組織やテラ施設の管理・運営、テラ行事の執行は、まだ継続されているといえよう。ただ、和讃・経の先立ちがいなくなっていること、参集する人が少なくなっていることが今後の継続に向けた大きな課題であろう。地域からの参加者が減少していることは、佐井長福寺の諸行事の継承においても共通する課題だと思われる。

「寺には女性が行くものという意識があり、男性は寺の行事をあまり知らない」というお話を伺ったが、筆者の民俗調査においてもそのような偏向がなかったか自省するところがある。テラ行事とそれに関わる女性の役割について、今後も調査と記録化が必要である。

《注》

- 2) 古川実「青森県佐井村福浦のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第38号』2014)「青森県東通村大  
利・尻労のテラ行事と念仏行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第39号』2015)「青森県東通村入口・む  
つ市大畑町小目名のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第40号』2016)「青森県むつ市川内町桧川・  
宿野部のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第41号』2017)「青森県風間浦村桑畑・むつ市大畑町  
関根橋のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第42号』2018)
- 3) 九学会連合連合下北調査委員会『下北 自然・文化・社会』1967
- 4) 清野耕司「下北北通りの地蔵講」(青森県民俗の会『青森県の民俗 第2号』2002)
- 5) 青森県文化財保護協会『新撰陸奥国誌 第四卷 みちのく双書第十八集』1965
- 6) 笹澤善八(笹澤魯羊)『佐井村誌』1937(『下北半島町村誌(復刻)』下巻 1980)
- 7) 前掲6)
- 8) 佐井村『2012年佐井村勢要覧 資料編』 <http://www.vill.sai.lg.jp/media/depiction/siryo.pdf>
- 9) 前掲6)
- 10) 前掲3)
- 11) 前掲4)

(引用・参考文献)

- 青森県史編さん室『青森県史叢書 平成14年度 下北半島北通りの民俗』2002  
青森県史編さん室『青森県史 民俗編 資料下北』2007  
青森県文化財保護協会『新撰陸奥国誌 第四卷 みちのく双書第十八集』1965  
角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典2 青森県』1991  
九学会連合連合下北調査委員会『下北 自然・文化・社会』1967  
佐井村役場『佐井村誌 上巻』1971  
笹澤善八(笹澤魯羊)『佐井村誌』1937(『下北半島町村誌(復刻)』下巻 1980)  
清野耕司「下北北通りの地蔵講」(青森県民俗の会『青森県の民俗 第2号』2002)  
宮本常一『私の日本地図3・下北半島』1967



磯谷のテラ



唱え



唱えの後の懇談



ジュズフキ